

〈中学生の部 優秀賞〉

かけがえのない存在

厚見中学校 一年 平光 穂乃佳

”汝らこの小さき者の一人をも慎みて侮るなかれ“

柚木 馥

私が、この言葉と出逢えたのは、社会福祉法人あしたの会「ふくろうの家」で夏休みに体験したことがきっかけだ。

私には、知的障がい叔父がいる。予測不可能な行動をとる叔父を怖いと感じることがあり、そんな自分に悲しくなる。だから、障がいのある方と関わることで、叔父に対する恐怖心を取り除きたいと強く思うようになったのだ。

「ふくろうの家」では、何事にも一生懸命に取り組む利用者さんの姿があった。とにかく、明るく、元気で私にいつも笑顔で話しかけてくださるWさん。人のために相手の仕事も頑張り、欠席者に毎回手紙を書く優しいMさん。ディズニーが大好きで、歌うことも好きな私と何も変わらないAさん。できないからやらせないのではなく、利用者さんができるよう工夫する職員さん。

初めは、利用者さんと向き合うことは、とても大変なイメージをもっていたが、利用者さん一人一人の個性をもっと

知りたい！向き合いたい！と思えるようになった。それは、「ふくろうの家」が温かい人たちであふれているからだと感じた。そんな中、私が一番印象に残った出来事がある。Iさんとの出来事だ。

私は自分の任された仕事が終わり、隣りで作業されていたIさんの仕事を手伝おうと思い、

「手伝いましょうか？」

と声をかけた。しかし、返事はなく、作業されていたため、私は”自分でやりたいんだ“と思い、その場を立ち去り、別の仕事に取りかかった。その後、私の判断は誤っていたことにすぐに気づかされる。Iさんは、話し始めるのに時間がかかり、人とのコミュニケーションを取るのが苦手だったのだ。それに気づいたのは、職員さんとIさんとの会話の時だ。

職員さんは、Iさんが話し始めるまでずっと待っていたからだ。その光景を見た時、私にも話し始めようとしていたかもしれないと、すぐ後悔した。

私は、Iさんの見たままを自分の立場に置き換え、勝手に判断してしまったのだ。一生懸命、私に答えようとしていたのかもしれないと考えると、本当に胸が張り裂けそうになった。

「見て感じる」世界は、自分で感じていく世界なのだ。

だから、思い込みや誤解も多いことに気づかされた。

音が苦手な人には、音を立てないように配慮したり、分量が苦手な人には、枚数で伝えて分かるようにサポートしたりする。それは視力が悪い人が眼鏡やコンタクトレンズをするのと同じように、利用者さんが生活を送るために、どんな生きづらさを抱えていても一人一人がもつ様々な能力を使って働けるよう、援助してもらうことは「当たり前」のことなのだ。

障がいのある人の命は軽く、障がいのない人の命は重い、ということとは決してあってはならないからだ。

命の重さは等しくあるべきで、一度きりの人生を最高に輝いたものにし、本当に生まれてきてよかったと健常者であっても障がい者であっても、思えるようなものにしたい。それは、全ての人の「共通」した願いである。

「ふくろうの家」は一九九五年に浅野直美さんのご好意で、岐阜市の南部にあった農作業小屋をそのまま岐阜大学の柚木馥名誉教授に無償貸与されたのを機に開設された。利用者さん三人の保護者と三人の職員で始めたそう。開所に携わった方のお話では、挫けることなく、日々失望することなく、自身を励ましながら続けられたのは、利用者さんの日々の生活を支えてくださる職員さんや大学の授業の合間にかけて、一緒にクッキー粉を顔いっぱいつけて励んでくださる柚木馥先生の懸命さに心を動かされた

のだと教えていただいた。そして、柚木馥先生は、自身が癌に侵されながらも、障がい者に最後まで寄り添ってくださったそう。こうして、あしたの会「ふくろうの家」は、柚木馥先生が亡くなられた後も、思いを引き継ぎ、血の通った温かで家庭的な施設・事業所となっているに違いない。それが伝わってくるのは、エントランスに、柚木馥先生のあの言葉が飾ってあるからだ。

私は、柚木馥先生の心の叫びとも感じた。

愛する我が子達が、人間らしく生きられるように見守っているのだ。

一人一人にかけがえのない命と心がある。

それを忘れるなよ！

と言ってくれているようだ。

そして、柚木馥先生の優しい笑顔が、今日も利用者さんたちを見守っている。「ふくろうの家」を通して、感じたことが一つある。それは、私たち健常者よりも、利用者さんたちの方が、人権を尊重し合っているということだ。日々、仲間と共に生きることを楽しみ、生き生きとした生活を送っているからなのではないのだろうか。

早く叔父に会って話がしたい。